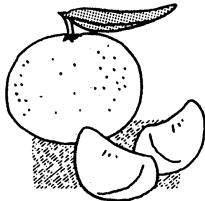


か、などと思わないわけではない。しかし、今挫けたら、自分が成長するどころか、中途半端な人間になってしまふ。不安の中で、それだけが私を支えていたように思う。

そんな私に、教師になつて良かったと思わせてくれる授業があつた。去年の冬、三年生の現代文で鷗外の『舞姫』を取り上げた時である。豊太郎に頼りきり、彼を悩ませ、しまいには狂つてしまふエリスが、私は好きになれなかつた。勿論、心から人を愛することは大切だと思うし、時代や環境を考えれば、エリスを否定することはできない。けれど、今とという時代に生きている女性であれば、いろんな面で自立した上で、相手の立場を尊重できる人の意見だけね、と前置きをして、そんな余談をした。そのひとことから、入試前にもかかわらず、「いや、たぶんそういう時期だからこそ、自立や仕事や恋愛という問題を、生徒たちは自分自身のこととして真剣に考えてくれた。さまざまな意見が出た中で、私はひとりの女子生徒に「先生の愛し方は人間



「どうせ先生は、おれたちが卒業するまでみててくれないもんな」

ギヤングエイジといわれる四年四組の帰りの会のことである。それまでざわついていたのが、この一言で水を打ったように静かになった。子ども達は、大きく目を開き、そして、不安そうに私の顔を見た。

ことの起こりは、二日前まで<sup>さかのば</sup>潮<sup>しお</sup>る。「授業中、先生はあまりふざけないからおもしろくないよ」

いつもと変わらぬ土曜日の朝。子ども達は何事もなかつたかのように、教科書を開いていた。

「先生、今度はおれたちが待つては勉強ができない」という意見が大勢を占めるようになつていて。しかし、「授業おもしろくね」と騒ぎ出した威勢

らしくないとと思う」と言われたのである。その人が好きなら、自分のその気持ちを何よりも大切にすべきだと彼女は言う。確かに、若いからこそできる考え方かも知れない。が、私に面と向かって自分を伝えようとしている彼女の姿勢が心地よかつた。強がるだけの自分や、すっかり忘れていた素直な自分を指摘された気がした。

本当の人間らしい愛し方なんて私もわからない。でも、あの『舞姫』の授業から、私はもう一度素直になつて自分の生き方や愛し方を考えている。

（県立原町高等学校教諭）

仕事を愛すること。人を愛すること。この小学校が初めての赴任校である。新米教師ということもあってか、子ども達は、授業中、休み時間を問わず、何でも私におづけてくれる。兄弟げんかのこと。好きな子の話から、先生のここが変だとか好きだとか。一つ一つ話を聞いていると、子ども達は満足そうな顔をして帰っていく。しかし、この日の授業は違つっていた。子ども達は日々に言いたい放題言いながらも、何か、言葉に表せないでいた。おこつたないように、口をとがらせながら――。

それから二日間、どうもしつくりしないまま金曜日の帰りの会を迎えた。そこでは出たのが「卒業」の言葉だったのである。切羽詰つたような男の子の声に、私は、「ああ、そうだったのか」と深く頷いた。子ども達が言いたくても言ひ表せなかつたもの、それは、とてももなく大きな、大きな不安だったのではないだろうか。私は、そのことに気づけなかつた自分を悔いた。

## 「先生、待つてるよ」

橋本礼子

